

ツアー日程表

| | | |
|------|-------------|-----|
| 第1週 | 出発の前に | 2 |
| 第2週 | 文という建物 | 8 |
| 第3週 | 補足語 | 16 |
| 第4週 | 述語と補足語による表現 | 24 |
| 第5週 | 述語の修飾語 | 32 |
| 第6週 | 取り立て | 38 |
| 第7週 | ヴォイス | 46 |
| 第8週 | テンスとアスペクト | 54 |
| 第9週 | ムード（1） | 62 |
| 第10週 | ムード（2） | 70 |
| 第11週 | 名詞句の構造 | 78 |
| 第12週 | 主題 | 86 |
| 第13週 | 指示語 | 94 |
| 第14週 | 複文（1） | 102 |
| 第15週 | 複文（2） | 110 |
| 第16週 | 複文（3） | 118 |
| 第17週 | 複文（4） | 126 |
| 第18週 | 品詞と語の構造 | 134 |
| 第19週 | 品詞（1） | 140 |
| 第20週 | 品詞（2） | 146 |
| 第21週 | 品詞（3） | 152 |
| 第22週 | 品詞（4） | 158 |
| 第23週 | 敬語と男女差 | 164 |
| 第24週 | ツアーの終わりに | 170 |

第1週

出発の前に

はじめまして。このツアーでしばらくの間、皆さんとごいっしょすることになります。どうぞよろしくお願いいたします。

いよいよこれから日本語文法名所めぐりのツアーに出かけるわけですが、出発する前に、注意事項がありますので、少し話を聞いて下さい。「文法」という言葉について考えておきたいと思います。

最近、こんな話をよく耳にします。それは、皆さんにも経験があるかもしれないませんが、外国の人に日本語の文法的な事柄について質問されてうまく答えられず立ち往生したという話です。質問する人たちは、日本人なら日本語のことをよく知っていて、きっといろんな疑問に答えてくれるだろうと期待するわけです。ところが、その期待に反して、聞かれた方は何をどう答えてよいのやら、途方に暮れてしまうのです。

でも、こんな結果になることについては、日本語が特別というわけではなくて、他の言語の場合も同じことなのです。例えば、英語圏の人たちに、英語の文法について質問してもたいていの場合、期待するような答えはもらえません。英語の文法については、英語を勉強している学習者のほうがむしろうまく説明できるのです。

このような話は、常識からすると、少し信じがたいことかもしれませんが、文法というものを考えるときには、とても大切な点なのです。自分が生まれ育った環境の中で無意識のうちに身につけた言語を「母語」といいます。私たちの場合、日本語が母語ということになります。母語というものは、毎日の生活の中で何の不自由もなく使っている言葉です。当人にとってはあまりにも身近過ぎて、空気と同じように、存在しないのも同然のものなのです。だから、日本語の仕組みがどのようになっているかというようなことは、日本語を母語として使っている私たちの日常の意識では、

そもそも問題にならないわけです。当り前のものをわざわざ問題にすると
 というようなことは、普通はしないものです。

しかし、この「当り前」のことも、日本語を母語としない外国の人から
 見れば、決して当り前の一言ですませることはできません。その人たちに
 っては、私たちが当り前だと思っている日本語の仕組みを理解しないか
 ぎり、日本語がわかったことにはならないからです。それは、私たちが外
 国語を勉強してその言葉を知ろうとするとき、その言葉の仕組みを理解す
 ることが必要なと同じです。外国語の場合は、文法のことを気にしない
 ですませるということは、普通はありえないのではないのでしょうか。

そういうわけで、私たちが日本語の文法の説明を求められて答えに窮す
 るというのは当然すぎるほど当然な話なのです。日本人だから答えられる
 はずだというのは迷信であって、本当は、日本人だからこそ答えられない
 ということなのです。私たちが期待通りの説明ができるようになるため
 には、日本語の仕組みがどうなっているかということを実感するための特別
 な努力がいるのです。しかも、自分の母語を知るというのは、なかなか大
 変なことなのです。他人のことはよく見えても、自分自身のことはなか
 かなか見えてこないというのと同じです。よほど目をこらして見つめないか
 ぎり、見えてこないのです。

でも、母語ならではのよさもあります。なにしろ、日本語の仕組みが頭
 の中にしっかり取まっていますから、日本語の表現についていくらでも直
 感が働くのです。これは外国語ではとても味わうことのできない経験です。
 少し、具体例を挙げてみましょう。

次の a と b の表現を比べてみて下さい。「自分のセーター」というのは誰
 のセーターのことだと思いますか。

(1) a. 孝子は幸司に自分のセーターを着せた。

b. 孝子は幸司に自分のセーターを着させた。

人によって少し判断に違いがあるかもしれませんが、たいていの方は、a
 では孝子のセーター、b では孝子のセーターか幸司のセーター、というよ
 うに判断するのではないかと思います。

第2週

文という建物

私が住んでいるところの近くに、「千年家」という名前の古い民家があります。手元にあるガイドブックによれば、14世紀頃に建てられた日本最古の民家だということです。日本の伝統的な家屋がどのようなものか知りたいたいと思って先日、見学に行ってきました。600年も前に建てられた家屋が今も残っているとはなかなか信じがたいことですが、実物を見てみると、なるほどと納得できます。柱が実に立派なのです。頑丈な柱に支えられていれば、家屋は少々のことでは壊れないものなのだと思ったことでした。

建物（家屋）を構成する部分にはいろいろなものがありますが、その中心になるのは建物を支える柱です。柱ができあがれば、建物の全体像もほぼ決まります。建築中の建物でも柱の様子を見るだけで、全体の形がどのようなになるのかの見当がつかますね。柱が決まれば、柱と柱の間を壁で埋めるといったように、柱以外の部分がどうなるかもかなり決まってくるわけです。

ところで、はじめに建物の話をしたのは、言葉の表現にも建物の組み立てに似た面があるからなのです。私たちが自分の知っていることや考えていることを言葉で相手に伝えようとするときに用いる表現は、「幸司が重い荷物を軽々と運んだ。」のようなまとまった内容の表現です。“まとまった”ということは、それだけで一応完結した形になっているということです。文章を書くときには、句点（「。」）を使って、このまとまりに印を付けますね。どこに句点を付けたらよいかかわからないということはありませんね。日本語を母語とする人なら誰でも、日本語の表現のまとまりを直感的に知っているわけです。このような表現のまとまりを「文」と呼ぶことにしましょう。

さて、さっきも言ったように、文の組み立ては建物の組み立てに似たと

第3週

補足語

ここで、少し自己紹介をさせて下さい。今回、皆さんといっしょに日本語文法ツアーを楽しませてもらっているわけですが、この種のツアーの企画・案内の仕事始めて十数年が経ちました。最初のうちは、どのようなツアーにすればよいのかわからなくて、ずいぶん苦勞したのですが、最近になってやっと案内の仕方がわかってきたような気がします。まだまだ、工夫の足りないところなどがあるかとは思いますが、よろしくおつきあい下さい。

というわけで、少し自己紹介を試みたわけですが、この「自己紹介」という表現を使いながら今日の話題に入っていきたいと思います。「自己紹介」というのは、本人が相手の人に自分を紹介することですね。ここで、「紹介」ということをさらに詳しく考えてみましょう。「紹介」の場面には、紹介する人、紹介の相手、紹介される人（または、もの）の3者が関係しますね。これら3者のうちで一つでも欠けたら、「紹介」は成り立ちません。

紹介の場面を文で表現しようとするれば、どのような言い方になるでしょう。文の中心は、「紹介する」という動詞ですね。「紹介した。」という述語の表現を用いるだけで、場面が目には浮かびますね。「紹介した。」と言うだけで、「誰かが誰かに誰かを紹介した。」といった内容の文であることが了解されるはずですが、ただし、「誰かが誰かに誰かを」の部分に、「雅和が幸司に孝子を」のように具体的な人物を入れてやらないと、情報としては不十分です。「紹介した」という述語だけでは、情報が足りないわけです。そこで、「雅和が」、「幸司に」、「孝子を」のような、述語が表す情報を補う表現が必要になります。このような述語を補う表現を、先週の説明にもあったように、「補足語」と呼ぶことにしましょう。

補足語がどのように現れるかを、もう一つの例として、「出会い」の場面

第4週

述語と補足語による表現

今週は、これまで話題にした述語と補足語という2つの要素を組み合わせて作られる表現を見ていくことにします。述語と補足語で作られる表現にはさまざまなタイプのものがありますが、ここではそのうち、特に4つの表現について考えてみたいと思います。

最初は、先週少し話に出た感情を表す述語の表現です。先週は、「憎む」、「感動する」のような動詞が例に出てきたのですが、感情を表す述語としては「憎い」、「ほしい」のような形容詞も使われます。このような品詞の違いを言い表すために、「感情動詞」、「感情形容詞」という名前を使うことにしましょう。

ところで、感情動詞と感情形容詞を区別しておくことに何か意味があるのでしょうか。そのことを考えるために、次の表現を比べてみましょう。

- (1) 新しい車がほしい。
- (2) 新しい車をほしがっている。

「ほしい」は形容詞で、「ほしがる」は動詞です。その違いは「が」と「を」という格助詞の使い方にも現れています（この点は、第2週で説明しました）。ここで問題にしたいのは、新車を手に入れたいという気持ちを持っているのは誰かという点です。そのような気持ちを持っているのは表現者本人でしょうか、それとも他の人でしょうか。普通の解釈では、(1)では本人で、(2)では他人ですね。どうしてこんな違いが出てくるのでしょうか。

同じような例として、次の表現を比較して下さい。

- (3) とてもうれしいです。
- (4) とても喜んでいます。

(3)と(4)で喜びの気持ちを持っているのは、それぞれ誰でしょう。(3)では表現者本人、(4)では他人ということになりますね。このように、形

第5週

述語の修飾語

さっきから『ワンドフル・コウベ』という雑誌を読んでいたのですが、「新しい神戸を遊ぶための街とお店の徹底大特集」となっていて、いろんな情報が盛り込まれたなかなか楽しい本ようです。中でも、ファッション都市・神戸などと呼ばれるだけあって、ファッション関係の記事が特に目を引きます。

ファッションにもいろいろあるでしょうが、身に付けるものということ言えば、主に衣服と装飾品ということになるでしょうか。『ワンドフル・コウベ』でも、衣服の話題と装飾品の話題は別々のところで取り上げられています。ところで、同じファッションでも衣服と装飾品とではそもそもどこが違うのでしょうか。

どちらも身に付けるものですから、ともに身体の付属品であることには違いありません。ただ、付属の仕方が違うということでしょう。衣服のほうは、身体を保護するためにどうしても必要なものです。一方、イヤリングやネックレスのような装飾品は、どうしても必要なものというのではなく、外観に変化を与えるための飾りです。飾りですから、不可欠というわけではありませんが、そういったものを付けることによって細部にいろいろな“表現”を加えることができます。

文の表現にも、装飾品に当たるものが見られます。ここでは、そのうち、述語の飾りの表現について考えてみたいと思います。述語の飾りというのは、「孝子は休暇をゆっくり楽しんだ。」の中の「ゆっくり」のような表現のことです。この場合、文の中心は「楽しんだ」という述語です。「孝子は」と「休暇を」は、述語を補う「補足語」です（厳密に言うと、「孝子は」は「補足語」の他に「主題」も兼ねています。「主題」については、第12週で詳しくお話しします。）。補足語はファッションに当てはめれば、身体にと